

英語の付加疑問文における助動詞の用法: 階層意味論的アプローチ

主濱 祐二

1 はじめに

英語の付加疑問文では、次の典型的な例(1)のように、「付加疑問節の主語と助動詞は主節のそれと一致する」という統語的特徴が広く見られる。

- (1) a. The ship has already left, hasn't it?
 b. Pat doesn't speak Arabic, does he?

この特徴に関して、規範的な文法書では、英語の付加疑問節（以下、付加節）は次のような規則に従って形成されると説明されてきた。

- (2) a. 付加節は助動詞＋主語の語順を取る。否定辞 *not* は接辞化し、助動詞に付加するか、あるいはそのまま主語に後続する。
 b. 付加節の主語は、主節の主語を置き換えた代名詞である。
 c. 付加節の助動詞は、主節の助動詞と同一である。
 d. 主節が肯定である場合は付加節は否定に、否定である場合は肯定になる。

(Quirk et al. (1985:810))

これらの規則を適用すれば、(1)のような典型的なケースは問題なく説明することができる。しかし、次のように助動詞 *may* を含む場合はどうだろうか。

- (3) Jason may give you his book report tomorrow, won't he?

(3)では、付加節に主節と異なる助動詞が用いられており、(2)、とりわけ(2c)の規則を用いて説明することができない。

本研究では、主に(3)のように主節が助動詞を含む場合の、主節と付加節に生ずる助動詞の一致・不一致に焦点を当て、付加節中の助動詞がどのように決定されるのか、意味論の視点から考察する。

2 先行研究

以下で、助動詞と付加疑問文の文法的特徴と、これまでの付加疑問文の統語論・意味論的研究について概観する。

2.1 助動詞の用法と意味

助動詞は通例、法助動詞(modal auxiliaries)と非法助動詞(non-modal auxiliaries)に二分される。Leech (2004:72-89)は、法助動詞の担うモダリティーを epistemic (認識様態的)と root (根源的)の2種類に大別し、それぞれの法助動詞について詳細に解説している。Leech の can, must, may の意味についての解説を次にまとめておく。

- (4) a. can (i) 能力(Root): Can you read and write?
(*be capable of, know how to...*)
(ii) 許可(R): You can stay here as long as you like.
(*you are allowed to...*)
(iii) 可能性(Epistemic): Even expert drivers can make mistakes.
(*It is possible for ... to...*)
- b. may (i) 許可(R): May I offer you a drink? (AmE では Can.)
(ii) 可能性(E): Careful, that gun may be loaded.
(*It is possible that ..., AmE では Might.*)
- c. must (i) 義務(R): You must be back by 10 o'clock.
(*It is necessary that ..., AmE では Have to.*)
(ii) 必然性(E): He's not home yet — he must be working late at the office. (*It is necessarily the case that ...*)

ここでは、①それぞれの法助動詞について、法助動詞を用いないパラフレーズ(*be capable of, you are allowed to* など)が可能であること、②アメリカ英語では、義務の *must* や許可・可能性の *may* はそれぞれ *have to, can, might* を用いて表す傾向があることの2点に留意しておきたい。さらに、Leech は *may* に関して、③ *may* が event verb (状態動詞でない、*go, come, get* など)をとる場合、その動詞によって表される内容は通例未来の出来事を示すとも説明している。

助動詞の用法について、Quirk et al. (1985), Zwicky and Pullum (1983)は次のように指摘している。

- (5) a. *mayn't* はイギリス英語の用法であるが、稀である。アメリカ英語では非文法的である。
b. *shan't* はアメリカ英語では稀である。
c. アメリカ・イギリス英語両方で、*ought* よりも *should* の方が一般的である。
d. *dare* と *need* の助動詞用法(e.g. *daren't, Dare he...?*)は、特にアメリカ英語

では稀である。

2.2 付加疑問文の文法的特徴

第1節で、付加疑問文では主節と付加節で主語と助動詞が一致するという特徴があることを見たが、この特徴は他言語の付加疑問表現ではあまり現れないため、英語に特有の文法的特徴であると言える(*cf.* 安藤 (2005))。(6)は、フランス語、ドイツ語、日本語の付加疑問表現(それぞれ下線部)の例である。これらの言語では、付加疑問の形式が固定されており、英語のように主節中の言語要素によって形式が変化しない。

(6) a. Tu connais 'La guerre des étoiles,' n'est-ce pas? (フランス語)

"You know 'Star Wars,' don't you?"

b. So eine weiße Gesichtsfarbe kann ein schlechtes Zeichen sein, nicht wahr? (ドイツ語)

"So a white face color can be a bad indication, right?"

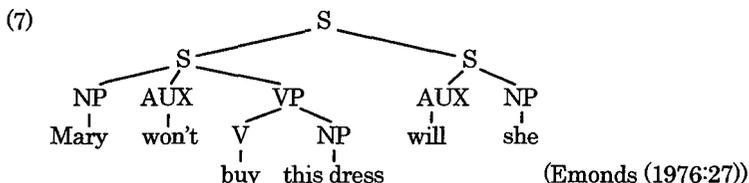
c. 昨日は、冷え込みましたよね? (日本語)

付加疑問文は、肯定・否定の極性の選択や、音調(上げ調子・下げ調子)によってその発話機能が変化するが、本論文では、音調や発話機能については扱わず、主節と付加節に生ずる助動詞の異同についてのみ観察していく。

2.3 付加疑問文の統語論的説明—Emonds (1976)

生成統語論の枠組みでは、英語の付加疑問文は、研究の重点が個別言語の文法にあった標準理論の頃に盛んに研究された構文であるが、ここでは、その時期の代表的な研究である Emonds (1976)を取り上げ、検討を加える。

Emondsによると、付加疑問文 *Mary won't buy this dress, will she?* は、次のような統語構造を持つ。



この文は、以下のような規則の適用を受けて派生される。

(8) a. 付加疑問形成規則 (根変形) :

(i) 平叙文全体を後方にコピー

[s [s Mary won't buy this dress], [s she will buy this dress]]

(ii) 主語・助動詞倒置 (SAI)

[s [s Mary won't buy this dress], [s will she buy this dress]]?

b. 動詞句削除

[s [s Mary won't buy this dress], [s will she [vp buy this dress]]?

この分析の利点は、付加疑問形成規則 (コピー・SAI) を根変形(Root Transformation)とし、根文(Root Sentence: 他の S 接点以外には支配されない S)にのみ適用されると仮定しているのので、次のように付加節が従属節内の要素と照応する非文を排除できる点である。

(9)*[s Bill asked [s if he could date someone]], could he?

Emondsの仮説は付加疑問文形成の典型的なケースを十分に説明しうる。しかし、(3)のような、付加節に主節と異なる助動詞が生じるケースについては全く言及されていないため、この点については説明が必要である。

2.4 付加疑問文の意味論的説明—中右 (1994)

中右(1994)は意味論の立場から付加疑問文形成の説明を試み、主に次のような複文に続く付加節を考察の対象としている。

(10) a. I always told you that I was a bit mad, {didn't I / *wasn't I}? (*Ibid*:166)b. I think Tom likes foreign beers, {*don't I / doesn't he}? (*Ibid*:167)

(10a)では、付加節 *didn't I?* は先行文の従属節中の要素 *I was* でなく独立節中の *I told* と照応している。一方で、(10b)では付加節 *doesn't he?* は先行文の従属節中の *Tom likes* と照応し、独立節中の *I think* とは照応しない。この2文の、照応の対象となる節の違いは、前節で見た根変形による説明ではうまく捉えることが出来ない。

中右はこの違いを、階層意味論の枠組みで説明した。階層意味論では、文の意味はモダリティーと命題という二極構造を成し、例えば *Frankly, I think you're making a big mistake.* には以下のような意味構造が付与される。

- (11) [M(S)₂ D-Modality frankly [M(S)₁ S-Modality I think [PROP you're making a big mistake]]]
 M(S) = Meaning of Sentence (文の意味)
 D-Modality = Discourse-Modality (談話モダリティ)
 S-Modality = Sentence-Modality (文内モダリティ)
 PROP = Proposition (命題) (Ibid:15, 69)

(10)についても同様に考えると、それぞれ(11)のような意味構造を持つと考えられる(ここでは、付加節を加えて提示している)。(12a)の I STATE は、無標の陳述態度を表す文モダリティーである。

- (12) a. [S_M I STATE [PROP₄ I always told you [PROP₃ I was a bit mad]],
 {didn't I / *wasn't I}? (=10a) (Ibid:168. 点線は筆者による)
 b. [S_M I think [PROP₄ Tom likes foreign beers]], {*don't I / doesn't he? (=10b))
 (Ibid:168. 点線は筆者による)

付加節とそれに照応する部分が点線で示されているが、(12)の意味構造から、付加節と照応するのは(上位)命題部であることが分かる。以上の考察から、中右は次のような原理を提示している。

- (13) 付加疑問文の照応原理:

付加疑問節は、主文の全体命題 PROP₄に照応する。(Ibid:169)

中右の考察の対象は主に複文であったため、(13)の原理が異なる種類の文にも適応可能か検証する必要がある。本稿では、以下、この分析を(3)で見たような法助動詞を含む単文に応用し、階層意味論による分析の妥当性を検討しながら、付加節中の助動詞の決定要因を探っていく。

3 付加疑問文に関するアンケート調査

3.1 調査の概要

付加疑問文のデータ収集のため、2006年4月、留学先のテキサス大学オースティン校(アメリカ合衆国)において、英語話者25人を対象に筆記によるアンケート調査を行った。被験者の出身地、年齢等の分布は次の通りである。

- (14) a. 出身地: アメリカ合衆国 21 (テキサス 14, カリフォルニア 2, オハイオ 1, ヴァージニア 1, ニューヨーク 1, アリゾナ 1, ハワイ 1), イギリス 1, インド 1, マレーシア 1, ロシア 1.

- b. 年齢: 10 代後半 2, 20 代 22, 50 代 1.
 c. 職業: 学生 22, 図書館司書 2, 英語講師 1.

調査では、被験者に個別に質問用紙を手渡し、以下のシナリオに従い、34 の文に付加節を書き加えてもらった。

Scenario:

Dr. Syntax invented the Tag Question Machine (TQM). This machine can add a tag question to any sentence Dr. Syntax says. For example:

Dr. Syntax: Mr. Smith wrote an autobiography, ...

TQM : Didn't he?

Dr. S : Mrs. Smith isn't kind to her husband, ...

TQM : Is she?

Dr. Syntax has to carry out more experiments on the machine to see its performance...

Your task:

Play the role of the Tag Question Machine and fill in the following blanks.

(1) Dr. S: Aaron has five cents in his pocket, ...

TQM: _____

(以下省略)

3.2 調査結果

調査結果を見る前に、被験者の付加節内の極性選択の傾向について述べておく。

(2)で見たように、通例、付加節の極性は主節と逆転するが、今回の調査では、25 人中 18 人が極性を逆転させる傾向があり、残りの 7 人は極性を変えず、一致させる傾向が見られた。

3.2.1 法助動詞

それでは、法助動詞を含む付加疑問文から結果を見ていく。まず、can と could の例を見よう。

(15) Beth can run fast, ...

a. can't she?.....18

b. can she?.....6

c. does she?.....1

d. can't she?.....2

(16) Beth could answer the question, ...

a. couldn't she?.....16

b. can she?.....4

c. could she?.....3

Can, could の場合は(2)の統語規則に従って can't she?, couldn't she? が選択される。(16)では could/couldn't の他に can/can't も選択されている。

次に、**must** と **might** の例を見てみよう。

- | | |
|---------------------------------|--|
| (17) Beth must go home now, ... | (18) Beth might get there in time, ... |
| a. mustn't she?.....8 | a. might she?.....9 |
| b. must she?.....7 | b. won't she?.....7 |
| c. doesn't she?.....5 | c. will she?.....4 |
| d. does she?.....3 | d. mightn't she?.....3 |
| e. shouldn't she?.....1 | e. wouldn't she?.....1 |
| f. right?.....1 | f. can she?.....1 |

前の2例と比べると、**must**、**might** の場合は(2)の統語規則が要求する語形 **mustn't**、**mightn't** があまり選択されないが、ほぼ半数の話者が主文と同一の助動詞を用いている。しかし、(17)の **does/doesn't**、(18)の **will/won't** など、主文と異なる助動詞を選択する話者も多い。

最後に、**may** と **may not** の例を見よう。

- | | |
|---|-------------------------------------|
| (19) Beth may not see you tomorrow, ... | (20) Beth may see you tomorrow, ... |
| a. won't she?.....7 | a. won't she?.....13 |
| b. will she?.....6 | b. will she?.....5 |
| c. can't she?.....4 | c. can't she?.....3 |
| d. can she?.....4 | d. can she?.....1 |
| e. may she?.....1 | e. mightn't she?.....1 |
| f. might she?.....1 | f. might she?.....1 |
| g. mightn't she?.....1 | g. may she?.....1 |
| h. right?.....1 | |

May を用いて答えたのは1名のみで(2例で同一話者による回答)、付加疑問文では **may** はほとんど使われないことが分かる。不適格な **mayn't** を、**may she not?** のように分けて表す話者もいなかった。**May** の代わりに **will/won't** が最も選択され、次いで **can/can't**、そして **might/mightn't** も少数だが選択されている。

3.2.2 準助動詞(need to, dare to, ought to)

続いて、準助動詞を含む付加疑問文を見ていく。まず、**need to**、**dare to** の例を見てみよう。

- (21) They need to finish that work, ... (22) They dared to propose to her, ...
- | | |
|--------------------------|------------------------|
| a. don't they?.....13 | a. didn't they?.....15 |
| b. do they?.....3 | b. did they?.....8 |
| c. needn't they?.....2 | c. don't they?.....1 |
| d. need they?.....2 | d. dared they?.....1 |
| e. shouldn't they?.....2 | |
| f. must they?.....1 | |
| g. did they?.....1 | |

(5)で Quirk et al.が指摘したように、need/needn't they?, dared they? はあまり現れず、その代わりに do が最も選択されている((22d)の dared they?はイギリス英語話者の回答)。Need と dare は本動詞として用いられていることが分かる。

(21)では、少数だが shouldn't や must も選択されている。

最後の例は ought to と ought not to のペアである。

- (23) Beth ought not to smoke, ... (24) Beth ought to smoke, ...
- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| a. shouldn't she?.....12 | a. shouldn't she?.....12 |
| b. should she?.....5 | b. oughtn't she?.....4 |
| c. ought she?.....4 | c. ought she?.....4 |
| d. oughtn't she?.....2 | d. should she?.....3 |
| e. will she?.....1 | e. does she?.....1 |
| f. isn't it?.....1 | (f. no reply.....1) |

Ought の場合は統語規則が各例で要求する ought she?, oughtn't she?も選択されるが、それよりも shouldn't がより選択される。これは(5)の Quirk et al.が指摘するように、ought より一般的な should の方が好まれたためであると考えられる。

4 階層意味論による分析

この節では、特に法助動詞を含む文を取り上げ、それぞれの文の意味構造を記述し、階層意味論の枠組みで付加疑問節の照応について説明を試みる。

4.1 命題態度としての法助動詞

Sperber and Wilson (1986:74)は、*I wish that P* や *P, I suppose*. における *wish* や *suppose* を「ある命題 P に対する話者の態度の語彙的表現」と捉えているが、法助動詞も同様に捉えることが可能であろう。例えば Lyons (1977)は、認識様態的用法の *may* を取り上げて、*may* は以下のようにパラフレーズが可能で

あり、「ある命題に対する話者の主観的な推量を示す」述語であると述べている。

(25) He *may* have gone to Paris. / *Perhaps* he went to Paris. / *It's possible that* he went to Paris. (Lyons (1977:796-8))

また、澤田 (1993:185)は、「態度的法助動詞文は”It Modal be”構文でパラフレーズすることができる」と述べており、例えば *must* や *may* を含む文は次のように書き換えが可能である。

- (26) a. They *must* be at home by now.
 = It *must* be that they are at home by now. (*Ibid.*)
 b. It *may/might* rain tomorrow.
 = It *may/might* be that it will rain tomorrow. (*Ibid.*)

2.1 節で見た Leech の解説も合わせて考えると、認識様態的 (あるいは主観的・態度的)法助動詞は、「意味的に命題を補部にとる述語」と捉えることができよう。ここで、認識様態的法助動詞の意味構造の原型を、次のように仮定しておく。

(27) [_{S-M} (Subject NP) Modal [_{PROP4} NP VP ...]]

4.2 意味構造による分析

ここでは、3 節で見た法助動詞の文から *can*, *may*, *might*, *must* を取り上げ、各文に意味構造を付与しながら、付加節の照応の仕組みを分析していきたい。まず、(15) *Beth can run fast.* の意味構造は次のように表される (以下、付加節も意味構造に加えて提示する)。

(28) [_{S-M} I STATE [_{PROP4} Beth can run fast]], {can't she / can she /^{??*}does she}?

この場合の *can* は根源的用法で、話者の命題態度ではなく、主語の「能力」を表す。この文は第三者であるベスの能力について述べているので、文内モダリティとして無標の I STATE が置かれ、*can* は命題内の述語となる。点線で示したように、付加節は PROP4 内の *Beth can* と照応している。

続いて、(20) *Beth may see you tomorrow.* の意味構造は、次のようになる。

(29) [_{S-M} (Beth) *may* [_{PROP4} Beth will see you tomorrow]],
 {will/won't she /[?]can('t) she/^{??}might(n't) she/^{??*}may(n't) she}?

この *may* は認識様態的用法で、「推量・可能性」を表す。ここでは、命題「ベス

が明日あなたに会う」に対する話者の推量を表しているので、**may** はモダリティ内の述語となる。(21)の PROP4 内に **will** が入っているが、これは、推量の **may** が「未来を指示する時の副詞がなくとも、**event verb** が表す出来事を未来のものとして解釈する」(Leech (2004:96))ためである。推量の **might** も同じ性質を持っているため、未来時を示す表現がなくとも、次の例のように付加節に(**might** だけでなく) **will** が生じうる。

(30) **Beth might get there in time,**

- | | |
|-----------------------------|------------------------------|
| a. might she?9 | d. mightn't she? ...3 |
| b. won't she?7 | e. wouldn't she? ...1 |
| c. will she?4 | f. can she?1 |

以上の考察から、**may** が含まれる文でも、付加節は PROP4 内の要素と照応することが分かった。

最後に、(17) *Beth must go home now.* の意味構造を考えよう。この文の **must** は根源的用法で、主語に課せられる「義務」を表すが、Coates (1983:32)によると、**must** の表す義務には **strong Obligation** と **weak Obligation** があり、前者は話し手の関与が強く (つまり主観的)、後者は話し手の関与が弱い (客観的)。ここで、義務の **must** も(27)の意味構造の型を持つと仮定すると、(17)の意味構造は次のようになる。

(31) [_{S-M} (Beth) **must** [_{PROP4} Beth goes home now]], {**must(n't) she / does(n't) she?**}

(31)の **must** の文に続く付加節内では、**must** と **does** の二通りの助動詞が生起可能であるが、この点については「付加節は、義務の主観性が強い場合は命題部に、弱い場合はモダリティに照応する」と仮定しておく。

4.3 意味構造による分析の応用: **deny -ing** の付加疑問節照応

4.2 節で試みた意味構造による分析は、法助動詞を含む単文だけでなく、**deny -ing** を含む文の付加疑問文の照応にも応用することができる。

(32) **Carl denies attempting to murder his wife,**

- | | |
|-----------------------------|---------------------------|
| a. doesn't he? ...11 | d. did he?3 |
| b. didn't he?5 | e. he does?1 |
| c. does he?5 | |

Deny がある命題に対する否認のモダリティーを表し、また補部の **-ing** が時間的

に過去の出来事を指すことを考慮すると(cf. 江川 (1998:355-6)、(32)は次のような意味構造を持つ。

- (33) [S-M I STATE [_{PROP4} Carl denies [_{PROP3} Carl attempted to... III],
 {does(n't) he / did(n't) he}?

PROP4 内の *deny* がその命題内容である PROP3 を埋め込むと仮定すると、*does(n't) he?* は PROP4 に、*did(n't) he?* は PROP3 に照応していると考えられる。中右 (1994)は、例文(12a)や照応原理(13)で見たように、「下位の命題(PROP3 以下)とは付加節は照応できない」としているが、しかし、(32)とその分析(33)は、付加節が下位の命題と照応できる可能性があることを示唆している。

5 結論

本研究では主節が法助動詞を含む場合の付加疑問節照応について、階層意味論の枠組みで考察を加え、以下のことを論じた。①認識様態的(主観的)法助動詞を含む文は、モダリティー部と命題部から成る意味の二重構造を持つ。②その文に続く付加疑問節は、命題部に照応する(ただし、法助動詞の種類によっては、付加節はモダリティー部とも照応が可能である)。③意味構造による分析は *deny-ing* に続く付加節の照応にも応用でき、付加節が下位の命題(PROP3 以下)とも照応できる可能性が示された。

参考文献

- 安藤 貞雄. (2005). 現代英文法講義. 開拓社.
 江川 泰一郎. (1998). 英文法解説. 金子書房.
 澤田 治美. (1993). 視点と主観性: 日英語助動詞の分析. ひつじ書房.
 中右 実. (1994). 認知意味論の原理. 大修館書店.
 村田 勇三郎. (1982). 機能英文法. 大修館書店.
 Coates, J. (1983). *The Semantics of the Modal Auxiliaries*. Croom Helm.
 Emonds, J. (1976). *A Transformational Approach to English Syntax: Root, Structure-Preserving, and Local Transformations*. Academic Press.
 Leech, G. (2004). *Meaning and the English Verb*. Longman.
 Lyons, J. (1977). *Semantics 2*. Cambridge University Press.
 Quirk, R. et al. (1985). *A Comprehensive Grammar of the English Language*.

Longman.

Sperber, D. and D. Wilson. (1986). *Relevance: Communication and Cognition*.
Blackwell.

Zwicky, A. and G. Pullum. (1983). Cliticization vs. Inflection: English N'T.
Language 59: 502-513.

(岩手大学大学院教育学研究科教科教育専攻英語教育専修)